様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ５ 月 ２９ 日現在

機関番号：１１３０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４５２０３８２

研究課題名（和文）トポスとしてのアビシニア――近代日欧におけるアフリカ認識の変転

研究課題名（英文）Images of Abyssinia: Changes in Perceptions of Africa in Modern Europe and Japan

研究代表者
藤田　緑（Fujita, Midori）

東北大学・国際文化研究科・教授

研究者番号：１０２１９０２４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、アフリカ・イメージの形成と変遷とを、「史実」の検証を含め、歴史書、地理書から、使節記、旅行記等の体験記、及び戯曲や小説等の文学作品、特に「大衆」に支持された作品の考察・分析を通して、複合的に究明しようと試みる。1868年アビシニア戦争を例に取り上げ、詳しく分析を施した結果、イギリスではアフリカという場がことさらアビシニアを「野蛮」な地に貶める装置として働くことが明らかになった。一方、日本におけるエチオピアのイメージは、使節団の訪問によって後進的なアフリカ・イメージが一掃され、ポジティブな像が結ばれた。

研究成果の概要（英文）：This research project is an attempt to probe into the formation and changes of Africa's images in modern Europe and Japan by reviewing historical, geographical and diplomatic documents as well as travelogues and other literary writings. Focusing on the 1868 Abyssinian War and making a thorough analysis, it has come to light that Africa functions in England as a device to make Abyssinia a barbarous and uncivilized land, whereas, in Japan, backward images were eradicated and favorable images created among Japanese people by the official visit of an Ethiopian delegation to Japan.

研究分野：比較文学

キーワード：アビシニア戦争　エチオピア　アフリカ認識

1．研究開始当初の背景

「ブンガ・ブンガ」という言葉を耳にすると、数年前に世間を騒がせたイタリアの首相の醜聞が想起されよう。この奇妙な響きを持つ言葉は、20 世紀初頭のイギリスで生まれた「素晴らしい」を意味する「エチオピア語」であり、これは当時訪英中であったエチオピア皇帝らが公式に海軍を視察、戦艦を目にして発したとされた。だが、この一行は真っ赤な偽物であり、ケンブリッジ大学の学生らによる一代芝居であった。にもかかわらず、第一次世界大戦時にイギリス海軍がドイツの潜水艦を沈没させた際、「ブンガ・ブンガ」と言って祝福されたほど、人口に膾炙した言葉であった。イギリスにおいてこの偽皇帝を受け入れた背景は何であったのか、また「偽王族」事件から 20 年後の日本において、正真正銘の青年皇族も名を連ねた「エチオピア使節」が巻き起こしたエチオピア・ブームとは如何なるものであったのか。

本研究は、拙著『アフリカ「発見」』（岩波書店、2005 年）ならびに科研費研究「十八世紀ヨーロッパにおける「異境」をめぐる研究」（基盤研究（C）、平成 15-17 年度、研究分担者）、「文芸におけるアフリカ表象の変容：日欧比較研究」（基盤研究（B）（一般）、平成 18-20 年度、研究代表者）、「十八世紀日欧にみるベニョフスキー「世界周航」の衝撃」（基盤研究（C）、平成 20-22 年度、研究分担者）の延長上にある。これらを論考する過程において表出したトポスとしてのアビシニアが生み出すダイナミズムのなかでも、時代を近代に絞り、平成 18 年より毎年さまざまな切り口から積み重ね、本研究課題の方向性と実効性を見定めるに至った。

２．研究の目的

本研究は、上記の出来事に通低するイギリスの対アビシニア戦争を起点にして、ヨーロッパと一見無関係に映ずる日本におけるエチオピア・アフリカ認識を明らかにするものである。即ち、イメージの形成と変遷とを、「史実」の検証を含め、歴史書、地理書から、使節記、旅行記等の体験記、及び戯曲や小説等の文学作品、特に「大衆」に支持された作品の考察・分析を通して、複合的に究明しようと試みる。

アビシニア戦争とは、エチオピアで拘束された外交官を含むイギリス人、ドイツ人等欧州人の解放・奪還を目的とした 19 世紀中葉の軍事行動を指す。戦闘規模からすれば矮小な、今では等閑に付された戦争が、当時ばかりか 20 世紀中葉の欧州と日本でいかに広汎な影響を及ぼしたのか、又アフリカにとっていかなる意味合いを持ったのかを論究するものである。

対象とする期間は、19 世紀から 20 世紀中葉までとする。その理由は、①エチオピアが群雄割拠の時代から「近代」へ突入するのが 19 世紀中葉であること、②列強によるアフリカ分割の結果、エチオピアが唯一の独立国となり、他のアフリカ諸地域との相違が歴然としたのも 19 世紀であったこと、③第二次世界大戦後はアフリカ諸国が独立に向けて動き出す時期であり、かつ技術革新によりイメージ形成に不可欠な報道・通信媒体が急速な発展を遂げたこと、の三点による。

以上が当初の研究目的であった。しかしながら、文献調査の結果、膨大な史資料の存在が判明したため、それら史資料を最大限に反映させた研究に力点を置くこととし、研究目的とその期待される成果に変更が生じたことを付記する。

３．研究の方法

本研究は 3 年計画とし、1 年目ではアビシニア戦争を取り上げ、報道された戦争と、戦争の実態、ならびに文学に与えた戦争の影響について究明する。その上で、ヨーロッパ（英・独）における同戦争の意義をアビシニア・イメージとの関連で明らかにする。研究方法としては、渉猟した一次資料を照合しつつ、分析を施す（以下同様）。具体的には、①イギリスにてアビシニア戦争に関する報道記事の悉皆調査を実施し、それらの記事分析を通じて、当時のイギリスにおいて一般的にはアビシニアがどのように捉えられていたかを見極める。②報道された戦争とは別に、外交文書、士官や医師、捕虜となった宣教師らの記録を基に、戦争の実態を検証するとともに、同戦争を前後して起きたアシャンティ〔現ガーナ〕戦争やボーア戦争との比較を通して、アビシニア戦争の特質を抉り出す。③同戦争と文学との接点を模索し、この戦争の裾野の広がりを確認する。2 年目は一見、アビシニア戦争とは無関係に映ずる、来日したアビシニア使節に焦点を定める。エチオピア側の記録を日本に残されている外交文書、各省報告書等の記録から検証し、併行して英国、米国、ドイツの対エチオピア政策から国際社会におけるエチオピアの位置を確認しつつ、使節の真の訪問意図を探る。最終年では、19 世紀アビシニア戦争がイギリス、日本、ドイツに投じた波紋について明らかにし、一国、一民族の他国におけるイメージ形成のメカニズムの一端の提示を目指す。

４．研究成果

イギリスは 1798 年ナポレオンのエジプト遠征を契機に、1839 年アラビア半島南端のアデンを占領、欧州とインドを結ぶ要衝を確保して、対岸のアフリカ大陸への進出も果たす。1841、49 年にアビシニアの一地方王と友好通商条約を締結する。宣教団体もすでにアビシニアで活動を始めてはいたが、同国が一般のイギリス人の意識にのぼることはなかった。他方、文芸においては、18 世紀欧州を「席巻」した S.ジョンソンの『アビシニアの王子ラセラス』が依然として版を重ね、また、19 世紀早々には J.ブルースによるナイル川源流発見

のための大部なアビシニア探検記（1790）が再販されてもいた。しかし、一般の人々にまで浸透する確固たるエチオピア像が形成されたわけではなかった。それは、19 世紀中葉に突如として起こった、アビシニア皇帝によるイギリス公使ら欧州人の拘束事件に端を発した「1868 年アビシニア戦争」まで待たねばならなかった。同戦争は英国、米国、インドから多くの新聞記者が派遣された、世界的にも耳目を聳動した出来事であった。夏季休暇等を利用してイギリスで行った文献調査によって、従軍記者の記事をはじめとして、報告書、捕虜による手記等、膨大な量の史料の存在が判明した。その結果、それら史資料のなかから、公使ら解放のために派遣された使節らを中心とした詳細にわたる記録を主たる考察の対象に定めた。アビシニアの民族、風習、景観、気候から、解放に向けての交渉、皇帝との折衝、戦争に至る経緯、戦争中・戦争後の両軍の様子等、アビシニアのファーストハンドの情報ならびに戦争の実相を統合して把握することが、本研究にとって必須であると判断したからである。そのうえで、同戦争終結後、イギリスに連れて行かれたアビシニア皇帝の幼い遺児の同国における処遇の実態――彼の存在をイギリスとしていかに戦略的に活用しうるのかに腐心する様――を明らかにした。

ことの発端は、アビシニア皇帝がイギリス領事をはじめ、エチオピアで布教や技術指導に従事していたヨーロッパ人と女性を含むその家族を人質として捕縛したことにある。膠着した関係修復のために派遣された使節団をも拘束される異常事態が出来、業を煮やしたイギリス政府によって軍隊が投入されたのである。イギリスの使者にもかかわらず、正使の Rassam はアデン英領事館の書記官に過ぎず、イギリス国籍ですらなかった。一見不可解なこの事実は、折衝の困難さと交渉決裂をも念頭に置かざるを得なかった当時の為政者の微妙な立場を反映していたともいえよう。敗北を悟った皇帝は自殺、首都は炎上し、一連の騒動に幕が引かれた。解放された捕虜らの帰郷は、イギリス、ドイツ、スイス等各国民衆の話題をさらった。同戦争がアフリカ大陸で頻発した他の局地戦争と異なる点は、職業軍人と「野蛮な原住民」との領土をめぐる衝突ではなく、アフリカの「文明化」に尽力する民間人が巻き込まれたことにある。故に、人々は「捕虜」らに感情移入し、報道に一喜一憂した。否が応でも「アビシニア」へ関心が高まり、それが夥しい同国関連図書の刊行を誘発、その結果、様々なアビシニア・イメージが産み落とされていったといえる。だが、なんといっても、ヨーロッパ人を、しかも女性までも拘束したエチオピア皇帝は、野蛮の極みとされ、皇帝を猿に模したイラストも誌面に登場した。イギリス軍に追い詰められ、自ら命を絶ったことも、エキセントリックな「狂った皇帝」のイメージを増幅させた。その一方で、渡英した幼いアビシニア皇太子の薄幸の短い人生――イギリス政府より養育を託され人々の、幼子の成長への無関心と思える態度が結局は彼を死へと追いやる――は、一部の人々の共感を喚起しもした。現代では等閑に付された歴史の一齣を当時の文脈に戻すことによって、アビシニア、ひいてはアフリカにまつわるイメージが立体的に把握されたといえる。

アビシニア戦争終結から 40 余年経過したのちに「ブンガ・ブンガ」という言葉が産み落とされた。いわゆる、「偽エチオピア皇帝事件」である。この出来事の全容解明につながる文献も発掘できた。海軍が偽の電報により「エチオピア皇帝一行」の「戦艦視察」を信じ込んだのも、皇帝が「エチオピア」であったことと無関係ではない。ケンブリッジの学生らが偽王族に「エチオピア皇帝」を選んだのも、それほど、皇帝と言えば「エチオピア」と結びついていたからである。

アビシニア戦争と世紀末に南アフリカで展開されたボーア戦争は、ほぼ同時期に同じアフリカ大陸で勃発した戦争だが、イギリスに与えた影響は異なる。アビシニア戦争の場合は、エチオピア側によって不当に捕縛された英国公使・宣教師・民間人の解放のために英国が派遣した特使までも拘束したため、最後の手段として討伐隊が送り込まれた。報道陣も同行したこの戦争は、「未開」の地の「狂った」「野蛮な」皇帝から無垢な「善意の」ヨーロッパ人を救出するという英雄的行為としてイギリスでもドイツでも歓迎された。いわば、非文明対文明というわかりやすい構図となっている。しかしながら、ボーア戦争では、世界に冠たる大英帝国を相手に、小国「ボーア人国家」が「正義」のために無謀な戦いを仕掛けたという「大義」に、世界はボーアに快哉を叫ぶ。数か月の短期決戦で決着がつくはずであった戦争に、イギリスは最終的に 2 年 7 か月という長い年月と莫大な戦費の出費を強いられた。統治という側面からは英国の勝利に終わったものの、英国は財政的に疲弊し、「光栄ある孤立」から日英同盟の締結という外交上の大転換を強いられる。ボーア戦争は、最後の「紳士の戦争」と言われ、「白人」対「白人」の戦争であったことからも、英国人に一種のロマンティシズムを掻き立てた側面は否めない。しかし、長期化に伴い厭世気分と、ボーア人の無教養で「黒人に近い」民族イメージが定着する。白人でありながら蒙昧な民のイメージは、ボーア人国家が存するのがアフリカ大陸である、という事実によって増幅される。全く異なる種類の戦争――かたや白人奪還戦争、かたや資源と土地をめぐる帝国主義戦争――であるにもかかわらず、アフリカという場が、皇帝を、ボーア人をことさら「野蛮」に貶める装置として働いたのである。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

藤田緑、アビシニア狂詩曲――皇太子アラマユの数奇なる短い生涯、国際文科研究科論集、査読有、第 20 巻、2012、pp.1-15.

〔学会発表〕（計６件）

1. 藤田みどり、ングギ・ワ・ジオンゴの世界――抵抗・言語・伝統、第 50 回「中東」表象研究会、2014 年 12 月 25 日、仙台
2. 佐藤研一、若きレッシング作喜劇『ユダヤ人』の新しさ、第 83 回十八世紀ドイツ文学研究会、2014 年 12 月 21 日、東京
3. 佐藤研一、レッシングの喜劇『ユダヤ人』――キリスト教ヨーロッパからみた「異邦人」描写、第 48 回「中東」表象研究会、2014 年 4 月 30 日、仙台
4. 藤田みどり、ボーア人の描くボーア戦争（１）――ハーマン・チャールズ・ボスマンを中心に、第 46 回「中東」表象研究会、2013 年 10 月 23 日、仙台
5. 佐藤研一、J.M.R.レンツの翻訳における問題点――喜劇『軍人たち』を中心に、第 78 回十八世紀ドイツ文学研究会、2013 年 5 月 16 日、東京
6. 佐藤研一、コッツェブーの描くインド人――喜劇『英国のインド人』をめぐって、第 75 回十八世紀ドイツ文学研究会、2012 年 5 月 19 日、東京

〔図書〕（計１件）

佐藤研一訳 J.M.R. レンツ作喜劇『家庭教師』『軍人たち』鳥影社、2013 年

６．研究組織

(1)研究代表者

藤田　緑（FUJITA MIDORI）
東北大学・大学院国際文化研究科・教授
研究者番号：10219024

(2)研究分担者

佐藤研一（SATO KENICHI）
東北大学・大学院国際文化研究科・教授
研究者番号：80170744